

“上質なときを暮らす”マガジン

# 眺めのいい部屋

No.01

Autumn 2017



PROFILE いしざわ・かずお ●昭和4年、新潟県生まれ。新潟大学文学部法律学科を卒業後、憧れの教師になるが、もう少し勉強したくなり、法政大学大学院社会科学研究所へ。その後、『公益財団法人 日本証券経済研究所』に入社し、事務局長を務める。

いしざわ・みちこ ●昭和5年、大分県生まれ。大分県立第一高等女学校(現・大分県立大分上野丘高等学校)を卒業後、『日本銀行』大分支店へ入行。結婚後は住まいを神戸に移し、『住友信託銀行(現・三井住友信託銀行)』の本店に勤める。

## Special interview

Collected data/2017.6.28

石澤和夫さん(88歳)・道子さん(87歳)ご夫妻「SJR大分」在住

身軽になったからこそ  
選ぶことができた、  
理想の暮らし。

結婚までにお見合いをした回数は、ご夫妻合わせておよそ50回。上司のススメで渋々会ったおふたりでしたが、「これがまた意外に波長が合って」とスピード結婚を決めた石澤さんご夫妻。和夫さんは『公益財団法人 日本証券経済研究所』の事務局長を勤め上げ、道子さんは、『三井住友信託銀行』の本店で定年まで働きました。それぞれにキャリアを重ねてきたおふたりが、終の棲家として選んだのは「SJR大分」、道子さんの故郷です。決め手は何だったのでしょうか。悠々自適に暮らす「SJR大分」の居室を訪ねて、お話をうかがってみました。

旅を趣味としたおふたりの部屋の棚には、ロシアやウィーンなど海外の民芸品が品よく置かれている。

「天声人語」こぼれ話  
七十過ぎたら矩を越えるな

栗田 亘

「不思議、大好き。」「おいしい生活」などの名キャッチコピーを作った糸井重里さんが、書いていました。《谷川俊太郎さんのことばには、年をとったからこそその「正直さ」というものがある。すつとほんとのことを言う。じぶんにうそをついてない率直さが、そのまま伝わってくるので、とても気持ちがいい》▼谷川さんは高名な詩人ですね。エッセイは続きます。《いつぐら

の気持ちを正直に外にも出せるようになったのは、やはり六十歳前後からかな、と思います。当時ボクは朝日新聞の一面コラム「天声人語」を担当していました。いまは一人が交替で執筆していますが、ボクの時代は連日一人で書いていました▼休むのは十日に一度くらいだったでしょうか。そのときは同僚の論議委員が代わって筆を執る。しかしなるべくなら、コラムを自分の色に染めたい。だから、できるだけ休まない、休みたくなないと突っ張っておりました▼客観報道を旨とする新聞にあつて、個々の記者は原則として「私」を主語にした記事は書けません。「think」は禁句です。対

直になれる六十歳」が加わり、ボクは「think」を旨とするコラムを書きました。記者として幸せでした▼でも、新聞社を離れ古稀を過ぎた頃、ボクは突然気が付いたのです。単なるジジイ(ボクのこと)が自分に正直に振る舞うと、単なるわがままになりがちである。接客の店員に怒鳴り、役所の受付で喚く「暴走老人」の存在も他人事ではないのだ、と。七十を過ぎたジジイは、とかく生理的に「待てない」らしいのです▼七十歳に際して孔子は「心の欲する所に従えども矩を踰えず(思うがままに振る舞っても、度を過ぎないようになった)」と申しました。ただしあれは、聖人君子だからできたこと。君子ならぬ小人のボクに似合うキャッチコピーは「七十過ぎたら矩を越えるな」のようです。

くりた・わたる ●1940年(昭和15年)東京生まれ。コラムニスト。「朝日川柳」選者(選者名・西木空人、日本エッセイスト・クラブ常務理事、日本ナショナルトラスト理事。1965年から2002年まで朝日新聞で働く。勤務地は岐阜支局、北海道報道部、東京社会部、横浜支局など。のち論議委員となり、2001年までの6年近く朝日コラム「天声人語」を担当。2000本近いコラムを書く。著書に『漢文を学ぶ(1)』『(6)』『ボケット川柳(童話屋)』『明日は、どうしてくるのか?』(15歳の寺子屋)『シリーズ』(講談社)、『リーダーの礼節』(小学館)、『おとなのための漢文51』(河出書房新社)ほか多数。





結婚式当時の写真と思い出のアルバムは、それぞれ大切に保管している。

# 残されたひとが困らないように、身軽になろうと思ったのです。

——和夫

「まさか大分で人生の最後を迎えるとは、思ってもいませんでした」と、和夫さん。理路整然とお話されるそばには、ずつと書き溜めてきた人生録とアルバム。

「80歳を迎える前に、あの世に持って行くもの以外はすべて処分しました」身辺整理をするきっかけは、家を継いでもらうはずだった弟さんが亡くなったこと。

「わたしたち夫婦には子どもがいなくて、ふたりが死んだあと何も残さないように、身軽になろうと思ったのです。日記は主要事項を記録して焼却処分、山のようにあった専門書などの書籍や家具、洋服は、会社の後輩に押し付けました(笑)」

和夫さんは亡くなったあとの挨拶状まで用意する周到ぶり。横に座る道子さんは、和夫さんの話に大きく頷く。ふたりを引き合わせたのは共通の知人。和夫さんの勤め先は大阪だったが、そこで専務理事だったひとが、道子さんの当時の勤め先「日本銀行大分支店」の元支店長だったのだ。写真を見て3度断る和夫さんにもめげず、道子さんを後輩として可愛がっていたそのひとに粘り強く交渉されて、神戸デパートが実現した。結果、1週間後には和夫さんは婚約指輪をつくり、

今度は道子さんの住む大分へ向かうことになる。「電車に乗る前に、大阪・梅田の荷物一時預かりの側にあった市外電報の申し込み電話に、コチラダンゼン キニイッソ ソチラノハナシ コトワツ テクダサイツテ大分へ入れました。恥ずかしかつたなあ……」。

神戸での結婚生活は順風満帆。お互いに忙しく働きのながら、休みの日は京都や奈良へ日帰り旅行。このままこの場所に骨をうずめて……と考えていたが、いざ、終の棲家探しとなると、条件の合う老人ホームがなかなか見つからなかったという。

「身元引受人が近くにいないからと断られたり、居室の広さや築年数の割に金額が高額だったり。そんな中、妻の弟がこちらのパンフレットを送ってくれました」

いつでもスピードが勝負のおふたり、さっそく「SJR大分」へ問い合わせをして、4度目の見学で入居を決めた。

「最初に電話に出たスタッフが、細かい質問にもすべて答えてくれたんです。普通は担当者に代わるでしょう？ マナーもよくてアドバイザー的確だったので、印象がとてもよかったです」

暮らしの評価は1年後に、と和夫さん。ふたりの穏やかな表情を見ると、今のところは合格点のようだ。

[中庭] 1,400㎡もある中庭は四季折々に花が咲く。「楽しみながらハビリもできるように」と、歩道は1cmずつ傾斜をつけている。トマトなどを種から植えて育てるガーデニングサークルは、人気のアクティビティ。

[レストラン] 3食それぞれに2種類のメニューからセレクトできる。他にも、旬を味わう行事食や、誕生日会などのパーティー食も要望に合わせて企画。石澤さんご夫妻は料理に合わせて、ワイン、日本酒とお酒をたしなんでいる。

[大浴場] 地下700mから湧く掛け流しの天然温泉は、温泉の街・大分ならではのスペシャルサービス。炭酸水素塩泉で、身体の芯まで温まる。石澤さんご夫妻も、「掃除しなくていいし、快適」と、週に3日ほど利用している。

[図書ラウンジ] 入居者からの寄贈本が並ぶラウンジは、レストランや入浴からの帰り道にふらりと立ち寄れる。落ち着いた照明の下、内省の時間を過ごすこともできるし、和夫さんのように他の入居者との憩いの場としても。

[フロントロビー] 温かい木目調の壁に柔らかな照明、そして、笑顔のスタッフがお出迎え。フロントの後ろには、支配人が描いた“歩く”をテーマにした土壁の絵も。ソファでは、スタッフも交えて井戸端会議に花が咲く。

[足湯] 立ち上る湯けむりに風情を感じる、建物の外にあるコミュニティテラスの足湯コーナー。朝の散歩から帰って来たときに気軽に浸かりホッとひと息できる場所。女性の入居者同士で、楽しそうにおしゃべりする光景も。

# 気持ちのいい場所

「SJR大分」



## 一日のおわりには 美味しいお酒と 日々の記録を。 変わらぬ 夫婦のリズム。



# 生まれ育った大分の地に戻りたい、穏やかな日々を過ごしています。

——道子



子ども時代から書道習っていた道子さん。漢字は今井凌雪さん、かな文字は宮本竹運さんから指導を受けた。こちらは関西書道展で入選した作品。

フロントロビーやレストラン、図書ラウンジなど、SJRの共用スペースは各用途に合わせて、ラゲジュアリーで過ごしやすい空間を演出している。

石澤さんご夫妻が住む「SJR大分」は、JR「大分」駅から徒歩5分。近隣には、大型商業施設やシネマ、市民ホールや図書館、トレーニングルームがあり、何をやるにも徒歩圏内だ。大分駅前広がる「大分いこの道」を散歩したり、施設の中庭を1〜2周ぐるりと歩くのが習慣というおふたり。和夫さんは、散歩中に、ハタタリ会った入居者の男性と意気投合して、レストランのプライベートルームで男だけの食事会を開催したり、フロント前のソファで井戸端会議に参加し、別の入居者と本の交換をしたり。館内の共有スペースを、出合いの場に、交流関係をどんどん広げている。

一方、道子さんは、若い頃「大分放送合唱団」に所属していた経験から、コーラスクラブに参加中。「小さい頃から続けてきた趣味だから、ここでも歌えるのが嬉しい」と微笑む。

こうしてそれぞれの時間を過ごしたあとは、レストランでお決まりの晩酌タイム。これまでの暮らしに賑わいがプラスされ、食事の時間は、いつまでも会話が弾む。



食と暮らしを豊かにする  
陶磁器の里、有田の器。



【案内役】橋本親徳  
JR九州シニアライフサポート株式会社  
代表取締役社長

はしもと・ちかのり ●昭和27年佐賀県生まれ。昭和51年、日本国有鉄道入社。昭和62年の国鉄民営化時にJR九州に入社し、九州新幹線の計画室長やJR九州新幹線の大分支社長などを歴任。その後、九鉄工業株式会社専務を経て、平成25年6月より現職。



SJRのダイニングを覗くと、食事に有田焼の器が使われていることに気付く。  
「日常に大きな意味を持つ食事の時間をより楽しく」という思いから、橋本社長みずから、料理長やスタッフと共に有田へと足を運び、提供する料理や使い心地を考えながら器を選んでいくのだ。  
有田焼の専門商社22店が軒を連ねる有田焼卸団地。どの店舗



ヤマト陶磁器(ショールーム併設)は、自社で窯を持たず、地元の窯元と日々アイデアやデザインを共有、試行錯誤しながら新しいものを生み出している。SJRで使用する器へのこだわりは、家庭で使用するような温かみあるデザインと使い勝手にあるという。

Shop Information



ヤマト陶磁器ショールーム  
〒844-0024 佐賀県西松浦郡有田町赤坂  
2351-169 ☎0955-42-6111 営業時間  
10:00~17:00 年中無休(年末年始を除く)  
<https://www.yamatotoujiki.co.jp>

もバラエティ豊かな品揃えで、とても短時間で見て回れそうになり。しかし、たまたま通りかかった店に引き寄せられるように入った橋本社長。一目でその「ヤマト陶磁器」に惚れ込んでしまう。  
「仕入れのセンスが良く、選ぶのが楽しくなる品揃えに魅了されました。SJR千早開業時から最新の六本松まで、今では全館こちらでお世話になっています」(橋本社長)  
さらに、料理長からの「この器に高台を付けられないか」といった要望にも、窯元と連携して対応。職人との信頼関係があるからこそ出せる柔軟さも魅力だ。  
SJR開業のたびに必ず実施される「器選びの有田行」。なかなか楽しい旅のように思える。

オ ド ロ キ . モ モ ノ キ . ゲ ン キ の “気”

News\_Topics  
SJRレポート

Today my new life begins.  
—SJR六本松—



スタッフ24名の力を集め、  
他に類のない憧れの場所に。

今年9月1日、福岡市中央区に開業したSJR六本松。「安心快適」をベースに、ここならではの満足感と、より上質でこまやかなサービスを提供できるハイクラスな施設をめざしています。入居される方のそれまでの日常を上手に引き継ぎながら、快適な新生活をスタートできるよう、開業前から準備に奮闘してきた24名のスタッフたち。その1人に、SJR六本松への思いを聞いてみました。

これまで、10年以上にわたり、さまざまな介護現場で主任ケアマネジャーとして経験を積んで

きた生活相談員の中富かおりさん。豊富なスキルと誠実な人柄を買われ、今年4月にSJR六

本松の入居者を支える主要スタッフの1人として入社、現在の職務を任せられることとなった。

まずは、入居者の不安を払拭するため、本人の要望を最大限に尊重しながらケアマネジャー、ご家族との連携を図りつつ、介護計画の相談に柔軟に対応している。いざというときには、ケアマネジャーにも戻れる中富さんは、実に心強い存在だが、「日本一の施設をめざす」と社長に宣言した「まずは九州一でいいよ(笑)」と言われちゃいました」と、お茶

目な一面も彼女の魅力のようだ。このようにSJR六本松でさまざまなサポートを担う24人は、各分野で十分な経験を積んできたプロフェッショナルが率いる。「誰もが憧れる施設をめざし、全員で知恵と経験を出し合っていく」という共通した思いのもと、各自の持つ力を思う存分発揮し

ています。

「ご入居者全員の生活に直結した大切なポジションを任せてもらえるのは本望。これまでの経験をフル活用して、日常生活と介護、両方の質を少しでも上げていきたいです」

「ご入居者全員の生活に直結した大切なポジションを任せてもらえるのは本望。これまでの経験をフル活用して、日常生活と介護、両方の質を少しでも上げていきたいです」



左が中富さん。生活相談員として現場を取り仕切る。右は中富さんとペアを組む陣内さん。今までのキャリアを、オープンしたSJR六本松でフルに発揮したいと張り切る。

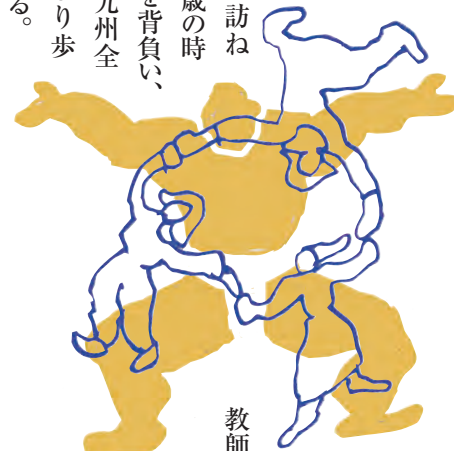


はなし  
あったか〜い噺 ①  
「今日は女房がいなくて…」

脚本家 ◆ 内館牧子

「どこを見たいの？案内してあげようか」  
私たちはおじさんのみことな解説付きで、夕方まで歩き回った。すると突然言われた。  
「金ないんだろ。うちでメシ食っていけよ。今日は女房がいなくて、何もなければどね」  
家は小さな小さな平屋だった。私たちは丸い卓袱台を囲み、おじさんの炊いたホカホカのごはんと干物を頬張り、

大横綱双葉山の故郷、大分県宇佐市を初めて訪ねたのは、私が19歳の時だった。リュックを背負い、女友達と二人で九州全県の安宿を泊まり歩く貧乏旅行である。



「ホントにありがとな。楽しかった。ありがとう」  
お礼を言うのは私たちの方なのだ。振り返ると、おじさんは満天の星の下で叫んだ。  
「また大分に来たら寄りな〜」  
夜汽車の中で、女友達がポツンと言った。  
「奥さん、死んだんだよ。写真があった」  
気がつかなかった。  
おじさんはこうやって他人を楽しませ、自分も楽しみ、独りの日々を送っているかもしれない。「自分のお守りは自分です」という強さに、双葉山の故郷を感じた。

熱い味噌汁を飲んだ。どれもこれもおいしく、教師だったというおじさんとの会話は弾み、笑い転げた。やがて、夜汽車で次の場所へ行く私たちを、おじさんは家の前で見送ってくれた。

うちだて・まきこ ● 秋田市生まれの東京育ち。13年半のOL生活を経て、脚本家となる。2000年、女性初の(財)日本相撲協会横綱審議委員に就任。2006年、東北大学大学院文学研究科を修了(修士論文/土俵という聖域 - 大相撲の宗教的考察)。ドラマ『ひらり』『私の青空』(NHK 朝の連続テレビ小説)、『毛利元就』(NHK 大河ドラマ)、『塀の中の中学校』(TBSドラマ特別企画)、小説『エイジハラスメント』(幻冬社)、『終わった人』(講談社)等多数。

『眺めのいい部屋』 NO.01

2017年9月15日発行

JR九州シニアライフサポート株式会社

〒813-0041 福岡市東区水谷2-50-1  
TEL.092-410-1255 FAX.092-674-3782

SJR

検索

発行・編集 九州旅客鉄道株式会社  
JR九州シニアライフサポート株式会社  
発行人 橋本親徳  
編集協力 矢崎潤子  
殿井悠子  
デザイン 杉本千夏  
校正 竹内映子

写真、イラストデータ協力(敬称略)

表紙 写真/大分県豊後高田市「田染の荘 実りの秋」  
3 写真/株式会社ジーエー・タップ(4-7)  
文/殿井悠子  
6 文/氏家加奈子  
表4 イラスト/田中靖夫